

第59回日本伝統工芸展金沢展



第59回日本伝統工芸展金沢展より
文部科学大臣賞「鍍黒味銅象嵌花器『心の海』」宮本士朗（石川）

特別陳列

■ 加賀藩の美術工芸

特別陳列

生誕100年記念

■ 寺井直次の漆の美

特別陳列

■ 能登の彫刻家たち

■ 石川県の名宝

— 国宝・重文・県文 —

■ 再興第97回院展金沢展



寺井直次の漆の美より
「金胎蒔絵水指 春」昭和51年
東京国立近代美術館蔵



能登の彫刻家たちより
「SPIRAL.3-TUKI」木戸 修

日本伝統工芸展金沢展

主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、日本工芸会
後援／文化庁、富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月26日(金)～11月4日(日) 会期中無休

※最終日(4日)は午後5時まで
(入場は午後4時30分まで)



軸裏金彩更紗文花器 吉田美統



沈金鯉の箱 前 史雄



網代隅切重箱 小森邦衛



蒔絵箱「十六夜」中野孝一



砂張干筋水指 魚住為楽



象嵌籠銀花器「樹影」中川 衛



桑造方盛器 川北良造



神代杉挽曲造木象嵌色紙箱 灰外達夫

◆観覧料

高校生以下	無料	無料
大学生	四〇〇円	三〇〇円
一般	六〇〇円	五〇〇円
	個人	団体(20名以上)

※当館友の会員は、受付での会員証提示により団体料金になります。

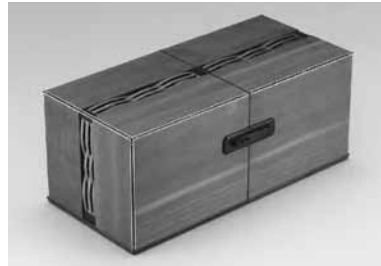
我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

今回は、陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸(七宝・硝子・截金など)の七部門の入選作品六一六点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の作品と、北陸三県、及びその他の地の入選作品を含め、約三五〇点を展示します。

今年の石川県の入選者は六十五人で、そのうち金工部門で宮蘭士朗氏が文部科学大臣賞を、木竹工部門で角間泰憲氏が日本工芸会新人賞を受賞しました。

講演会

演題 「日本伝統工芸展と私」
講師 森口 邦彦氏
(重要無形文化財「友禅」保持者)
日時 10月28日(日) 午後1時30分～
会場 美術館ホール 〈聴講無料〉



日本工芸会新人賞
一位造小単笥 角間泰憲(石川)



平文箱「富士和讃」
大場松魚(遺作出品)



友禅着物「滝の音」
二塚長生

◆展示作品解説

日時	11:00～	13:30～
10/27(土)	《漆芸》 山岸 一男	《陶芸》 武腰 潤
28(日)	《金工》 大澤 光民	講演会
29(月)	《金工》 宮蘭 士朗	《木竹工》 灰外 達夫
30(火)	《染織》 毎田 健治	《金工》 魚住 為楽
31(水)	《人形》 紺谷 力	《木竹工》 川北 浩彦
11/1(木)	—	—
2(金)	《漆芸》 中野 孝一	《陶芸》 中田 一於
3(土)	《染織》 二塚 長生	《陶芸》 宮西 篤士
4(日)	《漆芸》 小森 邦衛	石川県立美術館長 嶋崎 丞

加賀藩の美術工芸

10月25日(木)～11月28日(水) 会期中無休

学芸員の眼

加賀藩五代藩主の前田綱紀は、三十代で既に書物の収集で全国的に注目されていました。そして綱紀は単に収集するのみならず、熱心に読み込んでいる事実も特筆されます。こうした綱紀の学習意欲を支えたのが、自発な学習によって天と一体となる聖人への道を説く儒教や朱子学でした。今回は「青貝敬字筆筒」も展示されます。これは綱紀が書物を取め、座右に置いて使用した筆筒です。扉正面に螺鈿で「敬」の一字を大きくあしらひ、その下に『周易』坤の一節「敬以直内、義以方外、敬義立而徳不孤」が記されています。その大意は「敬（つつしみ）をもって、内心を正直にし、はじめをもって、外に向かう行いを方正にする。敬と義が両立すれば、その人の徳は孤立的ではありえない」であり、綱紀が学問を通して目指した聖人の姿を示しています。

加賀藩の文化政策は、幕藩体制に屈従を強いられた藩の独自性を主張する重要かつ有効な方策でした。軍事力や政治力を全面に出せば幕府を刺激し、改易の危機に直面します。しかし文化という土俵の上ならば、幕府に正面から挑戦することができます。加賀藩三代藩主の前田利常は、幕府から様々な圧迫を受けた京都の後水尾天皇を模範として、質・量ともに幕府を凌ぐ文化政策を打ち出しました。そしてその政策は、儒教や博物学的に深化されて五代藩主前田綱紀に継承されました。

加賀藩の文化政策は、大きく収集と育成に大別されます。名品の収集は、大名の格式を対外的に印象付ける重要な意義を持っています。前田家の収集は、日本の古筆や典籍類から、広く中国や西洋の文物にまで及んでいます。しかし、単に世界各地から名品を集め

ることにとどまらず、藩経営の一環として美術工芸の育成事業を行っている点に前田家の独自性があります。名工を招聘し、武器の制作や保守などで培われた技術の地盤を活用して、高い技術と洗練された美意識が融合した名作の数々が十七世紀を中心に加賀藩から生まれました。

今回の特別陳列では、収集された名品として「世説新語」、黙庵靈淵筆「四睡図」、荏柄天神縁起絵巻」上巻、周文筆と伝えられる「四季山水図」、雪舟筆と伝えられる「四季花鳥図」（以上、重要文化財）を展示します。そして会期が日本伝統工芸展金沢展とも重なることから、加賀藩の美術工芸育成事業を象徴する重文「百工比照」から金色類、木之類、釘隠引手、釘隠金具を展示します。

生誕100年記念 寺井直次の漆の美

10月25日(木)～11月28日(水) 会期中無休



「金胎蒔絵飾箱 富貴」平成元年 東京国立博物館蔵
Image : TNM Image Archives

学芸員の眼

寺井直次氏の生涯をたどっていくと、その功績は三つに分けることができるように思います。一つは、言うまでもなく重要無形文化財保持者に認定されるほどの作家としての高い技量によって、数々の秀作を発表してこられたことです。その精進の道は決して平坦なものではなく、病を得た時期もあり人知れぬ苦労があったことと推察されますが、生涯弛まず制作に向かう意志を秘め、繊細優美で気品に満ちた作品を生み出しました。

二つめは、金胎蒔絵の作品に見られるように、戦前の理化学研究所時代からの研究によって、金属の素地の上に漆を塗り、環境が異なってもゆがみのこない強靱なボディを創出したことです。県立工業学校、東京美術学校と優秀な成績をおさめ、卒業後は畑違いの化学の仕事に従事し、後年その成果を創作の上に活かすという、その知的探究精神は途絶えることがなかったといえましょう。

三つめは、戦後金沢へ戻り作家として立つことを決意したにもかかわらず、母校・県工からの強い要請によって教鞭をとることとなり、定年まで指導を続けたことです。「教育は、片手間ではできない」という思いで、制作のために教育を決しておろそかにせず、当県漆芸界の後進の育成に情熱を注いだのです。

大正元年、金沢に生まれた寺井直次氏は、蒔絵の美しさに魅せられ、十四年石川県立工業学校漆工科に入学し漆芸の基礎を学びました。その後、昭和五年に東京美術学校へ進学し、六角紫水、松田権六、山崎覚太郎といった近代日本の漆芸界を代表する人々に師事し、漆の可能性を追究しました。十年に美校を優秀な成績で卒業、財団法人理化学研究所に入りアルミニウムに漆の塗膜をほどこす研究に取り組み、その体験は後年、金属を素地とした金胎蒔絵の創出に活かされていくことになります。しかし中央での研鑽も、敗戦によって郷里に戻ることを余儀なくされ、戦後は金沢を生涯の制作の場としました。昭和二十一年には日展に初入選し本格的な作家活動を開始、三十年からは次第に日本伝統工芸展を中心に作品を発表していきます。その後の地道な技の探究は、とりわけ卵殻の技法

に個性を発揮することとなり、六十年「蒔絵」の分野で国の重要無形文化財保持者に認定されました。

また、寺井氏は母校の県立工業高等学校で長く教鞭を執り、退職後も石川県立輪島漆芸技術研究所初代所長として後進の育成に尽力するなど、石川県の漆芸界の進展に多大な貢献をされました。

本展は、寺井氏の生誕一〇〇年を迎えて、初期から晩年に至る作品七〇点を一堂に展示し、あらためてその優れた技の美をご覧いただくものとするものです。

■ギャラリートーク

十一月十一日、十八日、二十五日の各日曜、午前十一時より学芸員によるギャラリートークを行います。

「要観覧料」



「金胎蒔絵漆箱 美奈面」昭和62年
金沢市立中村記念美術館蔵



「極光」(2曲屏風) 昭和31年
東京国立近代美術館蔵

能登の彫刻家たち

10月25日(木)～11月28日(水) 会期中無休

学芸員の眼

能登地区を車で巡りますと、各地に石碑が多く建っていることに気付かされます。それは道路開通記念であったり、また圃場や造成、治水工事などの整備事業などの竣工や完成記念であったりするほか、地区の功労者の顕彰碑、文学碑など。また今時大戦の忠魂碑や慰霊碑、数は少ないながらも彫刻のある町造りに係ったの多種多様な作品まで見ることが出来、在所の道路に面し複数以上の碑が見えることも珍しくないものとなっています。そこでは近現代的な彫刻作品は少なくとも、土地を愛した人々の生活と営みの記憶の拠り所になっているものといえましょう。ランドマークでありランドスケープであり、地区の心の拠り所の一つにもなっている記念碑の存在に彫刻がこれからも関わっていただけることを願わずにはいられません。

日本海に大きく突き出た能登半島は、海を挟んで大陸・半島と向き合う位置にあることから、古くには我が国の表玄関側として往時の先進文化を伝える地区であるとともに、日本海航路の拠点地域としてもあることから、故郷を離れ海を越えて各地に雄飛する進取の気性も窺える地区であると言えましょう。

能登地区の永い歴史と人々の営みに育まれてきたこの地は今日、豊かな自然と伝統文化を伝え、我が国の原風景を残す地区の一つとなっています。

さて能登地区は今日、彫刻に繋がりました直接関係する伝統工芸や産業、美術学校が見当たらないにも拘わらず、能登地区出身で全国区で活躍する作家や、現在能登を拠点に活動中の作家、さらには能登出身の物故彫刻家を含め、多様な個性豊かな彫刻家の活動の展開が見えるもの

となっています。そこでは作家それぞれが自分の素材と向かい合っかけて紡ぎ出すような独自の展開が見えるもので、能登地区の風土のような一見、寡黙で地味ながらも素朴で確かな存在感を漂わせているものが多く見えます。

昨今の震災以来、改めて地域と人々の生活・文化を含めた繋がりに関心が高まってきており、各地区においても美術による絆の深化が期待されるなか、特に、野外の展示をも持つ彫刻分野の活動は、今後益々期待されるものがあるといえましょう。

展示では、石・木・塑造・金属の素材別に、現在活動中の作家作品と並び、能登地区出身の物故作家の作品を取り混ぜ展示するもので計二十作家、合計二十八件の作品を展示するものです。



顔 田中太郎



ANOTHER VISION 15 池上 奨

1F企画展示室

再興第97回院展 金沢展

11月15日(木)～28日(水) 会期中無休

第2展示室

石川県の名宝 — 国宝・重文・県文 —

10月25日(木)～11月28日(水) 会期中無休

本年九月現在、国宝の総点数は一、〇八三件、重要文化財は建造物二、一七四件、美術工芸品九、五六四件の合計一一、七三八件となっております。そのうち石川県には国宝二件、重要文化財一二七件(建造物四十三、美術工芸品八十四)が所在しています。

これまで当館では、数多くの指定文化財の公開を進めてきましたが、なかでも一昨年の「加越能の美術」では、県内に所在する国宝二件と重要文化財二十七件を公開し、県外より十四件を借用して展示しました。指定文化財をこのように大規模に公開することはきわめて珍しいことです。

これは当館が文化庁から「公開承認施設」とされていることにより可能となっているもの

日本美術院は岡倉天心らの呼び掛けにより一八九八(明治三十一年)年、横山大観をはじめとする日本画家二十六人が集まり創設されました。近代日本画の歩みでは日展とともに、巨大な足跡を築いてきています。

射水市ゆかりの文化功労者である郷倉和子氏の近作など同人三十二点、一般からの入選作六十五点の合計九十七点が公開されます。金沢展の巡回は二〇〇九(平成二十一年)年以来、三年ぶりです。日本美術院理事長の松尾敏男氏(文化功労者)の「白糸の滝」同人の福王寺一彦氏の「星降る海に(三)」など、洗練された作品群をご覧下さい。

主催／日本美術院、北國新聞社、石川県立美術館
財団法人石川県芸術文化協会

で、文化財の公開促進を図るため、その扱いに精通し、経験の豊富な施設がこれに認められています。当館は旧館時代からその認定を受けており、毎年秋に「石川の名宝」「石川の文化財」などとして公開してきました。こうしたこともあって、寺社など県内の所蔵者の方から文化財の保存管理を委託され、お預かりした文化財をこの機会に公開することにもつながっています。

今回の展示では、文化財保護強調週間にちなみ、この公開促進の意味あいから国宝・重要文化財あわせて十四点のほか、本年新たに石川県指定文化財となった「蒔絵亀図鞍・鐙」などを展示します。

後援／石川県、石川県教育委員会、金沢市、金沢市教育委員会、財団法人石川県美術文化協会、NHK金沢放送局、北陸放送、テレビ金沢、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお、北國新聞文化センター、金沢ケーブルテレビ

ピネット

◆入場料

一 般	当日	前売り	団体
中・高生	一、〇〇〇円	九〇〇円	八〇〇円
小学生	六〇〇円	五〇〇円	四〇〇円
	五〇〇円	四〇〇円	三〇〇円

※団体は二〇名以上

◆連絡先

北國新聞社事業局
TEL 〇七六一二六〇一三五八一



白糸の滝 松尾敏男



石川県指定文化財「蒔絵亀図鞍・鐙」

第7～9展示室

65周年記念 示現会展巡回金沢展

11月7日(水)～11日(日) 会期中無休

一般社団法人示現会は、本年四月、東京の国立新美術館で第六十五回展を開催しました。巡回金沢展では、昨年において本部基本作品六十一一点(受賞作品を含む)と地元石川県作品三十四点、合計九十五点を展示します。

示現会は堅実中正、清新な具象絵画を目指して、昭和二十二年石川寅二を中心に創立以来、(故)大内田茂士、(故)植原健三の両芸術会員を輩出しています。

平成二十一年石川県支部設立が承認され、一年より巡回金沢展を開催しています。今後とも県内美術界の恒例行事となることを目途に努力、精進いたします。

◆入場料

一般五〇〇円(二〇名以上の団体四〇〇円)
六十五歳以上四〇〇円 大高生三〇〇円
※障害者手帳をお持ちの方(付添者含む)・
中学生以下 無料

◆連絡先

森脇位泰 TEL 〇七六一―二二―一五三七

十一月の行事予定

◆土曜講座	石川県の漆芸	10日(土)	南 俊英 学芸第一課 担当課長	13時30分	美術館講義室	聴講無料
17日(土)	前田家の美意識 ― 収集と育成 ―	高嶋 清栄 学芸第二課長				
24日(土)	石川の近代彫刻 吉田三郎を中心に	北澤 寛 学芸専門員				
◆キッズプログラム(小学生親子対象)				13時30分	2Fロビー集合	参加無料
11日(日)	寺井直次のわざにせまる! 特別陳列「寺井直次の漆の美」鑑賞会					

展覧会TOPICS

村田省蔵展 ― 画業60年の歩み ―

平成25年1月4日(金)～2月11日(月・祝) 会期中無休

本展は洋画家村田省蔵氏の画業六十年の歩みを回顧するもので、初期の自画像や婦人像などの人物画から、金沢の家並み、シリーズとなった北海道の色彩溢れる風景や新潟の稲架木が立ち並ぶ風景等の近作まで、約九十点の油彩作品を一堂に会し、村田省蔵氏のためまずに深まる詩情と造形美の世界をご覧いただけます。

村田省蔵氏は昭和四年金沢市生まれ。県立金沢第二中学校から十九年に海軍飛行予科練習生として滋賀航空隊に入隊し、終戦により中学に復学、この間の価値観の変転に苦悩するのですが、二十年十月に開かれた第一回現代美術展で、宮本三郎の「少女像」に感銘を受け、絵の道に入ったのです。二十一年に金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)の第一期生として入学し、高光一也、宮本三郎に学びました。同級生は、故鴨居玲、円地信二、オクヤナオミ、谷昭二、富田裕夫等、多士済々です。在学中に婦人像で光風会、日展に入選し、二十五年に卒業するとさらに、研究科に進み、翌二十六年画家となることを決意して上京、小糸源太郎に師事しました。前年に小糸が教授となって来校した際に教えを受けたことを縁としたのでした。テーマを風景とし、日展に出品を続けて、五十年日展会員、平成二年評議員、十年内閣総理大臣賞、十八年恩賜賞、日本藝術院賞、同年日本藝術院会員に推挙されました。昭和五十年より鎌倉にアトリエを構え現在に至りますが、自己の画業の原点となった現代美術展には毎年出品を続け、石川の後進の育成に意を尽くしています。



村田省蔵 斑雪 平成20年

末政 哲夫 すえまさ・てつお 昭和7年(1932)～



黒に塗った鉄製の円柱上に、窓を意図して組み合わせたステンレス製の四角い枠を設置し、同じくステンレスの細い棒を繋いで作った立方体群を繋げ、星座の獅子座に見立てて構成した造作を窓枠の内側から外にかけて組み込んだ作品です。

窓に見えていた星座が、やがて天空に向かって伸びていくようなイメージを連想させてくれるロマン溢れる作品といえます。ステンレスの光る金属の冷たい質感とスッキリした形態はシャープな造形美も示しています。また鏡面に磨いた窓枠の面には、組み込んだ星座の造作や作品を取り巻く回りの風景を映し出し、さらに部分によっては照明の光を鋭く反射し、鑑賞

者の観る角度によっては予想をさせない光景の変化を見せてくれます。

作者の末政哲夫氏は昭和七年（一九三二）珠洲市に生まれ、金沢大学教育学部を卒業後、県内及び金沢市内の小中高等学校で教鞭を執りながら二紀会を中心に作品を発表しておられ、現在、二紀会委員であるとともに県内の金属造形の指導的立場にもあります。ステンレスなどの金属を用い、幾何学的な形態の中に、水・光・雲や天体を含む森羅万象の瞬間の姿を捉え、それらの造形化をテーマとしています。

（この作品は十月二十五日からの特別陳列「能登の彫刻家たち」展にて展示しています）

次回の展覧会 会期：12月1日(土)～12月24日(月・休)

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第2展示室	第3展示室	第5展示室
前田家の雅 —名物裂と能装束—	大乘寺の文化財 —加賀に伝わる 曹洞宗の名宝—	特集展示 新保甚平展 —風景巡礼—	特集展示 石川の近代彫刻を ふりかえって

ご利用案内

コレクション展観覧料
 一般 350円 (280円)
 大学生 280円 (220円)
 高校生以下 無料
 ※ () 内は団体料金
 毎月第1日曜日はコレクション展示室無料の日 (11月は5日)

11月の開館時間
 午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
 午前10:00～午後7:00

11月の休館日は
 29日(木)・30日(金)

広告



明治10年8月、
加賀藩 前田家の出資により創業。

金沢支店 / 〒920-8686
 金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131



●金沢第十二国立銀行開業免状の写
 (北陸銀行金融歴史資料館蔵)

www.hokugin.co.jp

お客様の「うれしい」を、私たちの「うれしい」に。北陸銀行

石川県立美術館だより
 第349号 (毎月発行)
 2012年11月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL http://www.shibi.pref.ishikawa.jp/